
人斬り獣三郎【闇影を斬る】

夢之 綴人

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

人斬り獣三郎【闇影を斬る】

【Nコード】

N0248A

【作者名】

夢之 綴人

【あらすじ】

依頼を受けて人を斬る『人斬り』を生業とする獣三郎。呪われた刀、愛刀“神哭-かななぎ-”と、我流の剣術“魔妖剣”を駆使し、今日も人を斬る。

桜里の情事（前書き）

このサイトに本格的なのが無い気がしたので歴史小説を書くことにしました！ でも、歴史小説は書いたこと無い（汗 てか、今まで三作しか書いたこと無いんです（汗汗 感想なんか、頂けるなら、と〜っっても、嬉しいです。

桜里の情事

既に外は夜の世界であった。

昼間、あれ程喧しかった蝉は、一体何処へ行ったものか……。すつかりその声は消え、代わりに野犬の鳴き声だけが聞こえていた。

獣三郎は遊廓『桜里』の一室より、下界を見下ろしている。

寝静まった街を、月の光だけが照らしていた。

特に変わった処のない、ただの街だ。

長煙管を吹かし、チラと部屋内に目をやった。

傍らでは、先程抱いた遊女『珠響 - たまゆら -』が寝息を立て、年相応の寝顔を見せる。

この姿を見ただけでは、誰も珠響がこの街で一番の“売れっ子”だとは思つまい。

今年で漸く19になったばかりだ。 獣三郎は

「つまらん」

と言うように、フンと鼻息をし、再び街に目を戻した。

何が在る訳ではない。ただ眺めているだけ、見下ろしているだけだ。

「……………」

何故だか無性に人が斬りたい。

出来れば、己と対等に死合える強者と。

いや……。贅沢は言つまい。

刀を提げてさえいれば良い……。

別に、何か厭な事が在った訳でも、酒に酔った訳でもない。ただの気紛れだ。

しかし……。ただの気紛れ……。

悪い癖だ。

これで斬られた者は、堪ったモノではないな。

そう思い、獣三郎は恰も他人事のように、ククツと喉で笑った。
「獣三郎さん。まだ起きていたの？」

珠響が獣三郎に声を掛けた。
どうやら、獣三郎の口から漏れた笑い声を聞き、起きてしまったらしい。

獣三郎は長煙管の煙を肺一杯に吸い込み、一気に吐き出した。
そして、ゆっくりと珠響を振り向く。

月光に獣三郎の整った顔が浮かび上がる。
非力な伊達男風な顔立ちではなく、むしろガツシリとした顔立ちだ。

「怖い……」

珠響が思わずと言ったように、ポツリと呟いた。

「まるで、鬼のような……」

更に珠響はそう続けた。

その目は、夢を見るように輝き、危うげに潤んでいる。

「鬼のよう」

と言われ、獣三郎はニヤリと笑う。

珠響は、獣三郎の本性を本能的に見抜いているようだ。

鬼……、強ち外れではない。

13年間の人斬り稼業。

今までの人生の、半分以上を闇で生きてきた。

これからも、闇に身を置き続けるだろう。

現に今も、理由も無く人が斬りたいのだ。

「凄絶な笑み……。でも、鬼と言うには、些し凜々しすぎる」

珠響はそう言うと、そっと獣三郎に寄り添う。

そして、獣三郎の匂いと温度を直に感じる。

もちろん、珠響も獣三郎も、何も身に着けてはいない。

「フン」

獣三郎は

と、一度だけ鼻息を吹くと、珠響のするままに任せた。

暫し、互いに無言。

そのままの時間が流れる。

そつと、珠響の手が、獣三郎の引き締まった体を撫で始める。初めは申し訳無さそうに、軽く獣三郎の割れた腹筋に触れる程度だったが、段々と大胆に獣三郎の体を撫で回す。

黙っていた獣三郎だが、胸の辺りを這い回る珠響の手を掴み、強制的に止めさせた。珠響は獣三郎の顔を見上げる。

「ねえ、獣三郎さん……。もう一度……」

珠響が濡れた声でねだる。珠響の瞳は、トロンと垂れ、潤んでいた。

「この遊び女は、一晚に二度も相手をするのか……」

獣三郎が冷たく見下ろす。

「意地悪、言わないで」

珠響が困ったような、切ないような顔で獣三郎の目を見る。

心からの反応か、男に媚びを売るのが巧いのか。

獣三郎にとっては何方でも構わないことだ。

抱く女に、精の捌け口以外の価値は無いと考えている。

尚も己を見上げている珠響の、潤んだ瞳を真っ直ぐに見つめ返す。そして

「フン」

と酷薄な笑みを浮かべ、珠響の妙に艶めく唇に、己のそれを重ねる

.....

桜里の情事（後書き）

妖しい雰囲気が出ていたでしょうか？
18禁部分は、皆様の想像
力で（笑

喧騒の街（前書き）

前書きと言うより【言い訳】です。夏に第一話を掲載させていただきます。ただきました。が、色々ありまして二ヶ月ぶりの投稿です。物語の季節は『夏』ですが、気にしないで読んでやって下さいm（

喧騒の街

街は既に活気に満ち、蝉が喧噪に拍車を掛ける。
やけに賑やかな朝である。

獣三郎はその街を歩いてきた。

普段なら真つ直ぐに、昏前からやっている賭場へと出掛けるのだが、今は手頃な“獲物”を探している。

街の活気とは裏腹に、この街には、飢え死にを待つばかりの無気力な浪人が多過ぎる。

刀を売り、ただ死ぬ場所を求めているが、鬪って死ぬ勇気がない。そんな、武士の成れの果てを見ながら、獣三郎は嫌悪感を覚える。しかし、斬り殺してやるほど、優しくはない。

ただ侮蔑の表情で一瞥するだけだ。

それにしても、目ぼしい剣客が居ない。

昨夜は『誰でも良い』とさえ思ったが、一晚経つと欲が出た。

いっそ、何処かの道場主とでも斬り合うか。

そう考えたが、獣三郎はすぐに打ち消した。

“木刀打ち”に真面目な奴は居るまい。

抑々、『剣術』を木刀で行うことに無理がある。

何程高名な流派の師でも、木刀打ちの道場の出では、実際に真剣で立ち合っても話しにならない。

其れ程木刀と真剣は違うのだ。

空気を打つ木刀に対し、刀は空気を裂く。

刃の迅さが比較にならない。

そして迅さが乗れば、刀の切っ先は延びる。

普段木刀を打ち馴れていれば、その感覚さえ掴めまい。

木刀打ちは刀ではなく、木刀を振る方が闘えるだろう。

それが、13年間の人斬り稼業で学んだ事だった。

まあ、其処等の破落戸ゴロツキを相手にするよりは楽しめるだろうが…。

獣三郎は

「クク…」

と声を殺して笑った。

これから人を斬ると言う昂揚感と、己が危険な存在だと自覚した可笑しさで、堪らなくなったのだ。

「ッ！！」

獣三郎は弾かれたように振り返った。

とつさに刀柄を握り、振り返った時には、腰に落とした愛刀“神哭”の鯉口を切っていた。

街中で半ば刀を抜き掛けていたのだ。

“神哭”は呪われた妖刀。

一度抜けば、血を吸わせるまで納めることが出来ない。

抜き掛けた刀を、そつと鞘に納めた。

騒ぎが起きては、面倒だ。

何人斬ろうが関係ないが、只々面倒なのである。

獣三郎は一点を見つめていた。

微かに殺気を感じたのだ。

微かなのだが、強く激しい、刺すような、強者特有の殺気を…。

振り返った瞬間、殺気は跡形も無く消滅していた。

今は何処からも、獣三郎への害意は感じられなくなっていた。

此程、己の気を操れるとは…

「面白い」

獣三郎が呟いた。

片方の口端を上げ、凄絶な笑みを貌 - かお - に浮かべる。

眼光は爛々と輝き、一人の男を睨め付けていた。

切れ長の目、高い鼻梁、非常に整った顔立ち。

ともすれば女に見える程の美貌の持ち主であった。

月代を剃らず、鬚は結っていない。

浪人だ。

長髪だが汚く伸びた感はない。

寧ろ手入れされている。

長身瘦躯、しかし脆弱ではないだろう。

「私の顔に何か？」

男が言う。

「とぼけるな」

獣三郎が返した。

二人は二間（約3・6メートル）を空けて対峙している。すでに間合い。

一触即発の空気が流れ出す。

…男の刀は平均より長く、やや曲がり強い。

居合いだな。と獣三郎は判断した。

冷静に相手を観察し、技量を見抜く。

恐らく、相手も同じ事をしているのだろう。

「どうですか」

不意に男が瞳を動かし、獣三郎に何かを問う。

男の視線は、二人の丁度中間に建ったうどん屋を見ている。

「フン…。良かろう」

人斬り獣三郎【闇影を斬る】

獣三郎は未だに掴んでいた刀柄から手を離した。
途端に緊迫した空気が薄れた。

影の噂

二人はうどん屋に入った。

昼には早いが、朝と呼ぶには日が高い。

半端な時間であった。

店は小ざっぱりとしていて、半端な時間に関わらず、客がぼつぼつと居るようだ。

割と繁盛店らしい。

卓に着くと、男は茶だけ、猷三郎は酒とうどんを注文する。猷三郎にとっては朝餉であった。

「貴方、猷三郎ですね」

注文が終わると、男が突然口にする。

「ほう。俺が猷三郎だと」

猷三郎は曖昧に答えた。

「ええ。人斬りを生業とし、放浪を続ける剣客……人斬り猷三郎です。貴方に話があります」

「……。フン。話とやら、聞かせてもらおう」

猷三郎が、暫く考えを巡らせた後、そう言った。

これで暗に認めた事になる。

そこに店の娘が、うどん、銚子と盃、突出しと茶を運んできた。

運び終わると愛想笑いもせず、とつと奥に引っ込んでしまう。

猷三郎が睨み付けたからだ。

話を中断させられるのは、気に喰わないモノだ。

「私の名は鎬木悠馬 - かぶらぎゆうま - 。話と言うのは、辻斬りの事です」

娘が去ったのを確認し、男、鎬木が話を切り出した。

「辻斬り……」

獣三郎は目を細め、探るように鎬木を見る。

「はい。この街に夜な夜な現れる辻斬り……。被害に遭うのは、皆、名の通った剣術家」

「ほう」

興味深気に相槌を打った。

「知りませんか？」

「何が言いたい」

「……」

「……」

沈黙。両者睨み合う。二人の間の空気は、痛いほど張り詰められた。

「……。ふつ。貴方が辻斬りかと思いましたが、どうやら違ったようだ。」

「鎌を掛けていた訳だ」

「失礼しました」

「良い。其れより、被害に遭うのは名の通った剣術家と抜かしたな。何故お前は狙われぬ」

「私は、只の小唄の師ですから」

鎬木はニヤリと笑う。

つまり、己の気を誰にも曝してないのだろう。

恐ろしい男である。

闇に生きる獣三郎は、本性を隠して生きる難しさを知っている。

「仮に、俺が辻斬りならば、一体どうするつもりだった」

鎬木の心を探る。

「斬ります」

*夜・桜里 昨夜と同じように、獣三郎は珠響と同衾した。

隣では珠響が、獣三郎の太く引き締まった腕に絡み付き、スースーと寝息を立てる。

それを尻目に、獣三郎はぼんやりと天井を見つめ、刻を待っていた。

辻斬りが現れる刻を…。

一日掛かって、鎬木の話の裏付けをとり、辻斬りについての情報を集めた。

その中で、鎬木悠馬の兄、鎬木兵衛も辻斬りの餌食になっていた事が判明する。

鎬木家は、旗本であるが、次男である悠馬は嫡男ではないため、気儘に家を出たらしい。

しかし、それは表の事情。

真実は、嫡子ではない悠馬の方が、よく剣を使ったため、兄の顔を立てて姿を消したのだそうだ。

今まで楽人の弟を演じ、剣気を隠して生きてきた男が、己の正体が露呈する危険を冒してまで辻斬りを探す。理由は辻斬りへの復

讐心。

「下らんな」

ぼつりと呟く。

身内への愛情等と、実に下らぬ事だ。

死んだ者への想いは、更に下らぬ。

しかし、鎬木から感じた殺気。

あれは間違い無く本物であった。

死を畏れないのではなく、とうに死を覚悟している男の眼をしていた。

ならば、俺と同じく強者の血を求めていたのだろう。

そう結論付けた。

一人納得した処で、そつと身を起こす。

珠響を起こさぬよう、夜具から這い出た。

差し込む月光は、刻が満ちた事を報せる。 獣三郎はニヤリと笑

う。

「狩りの時間だ」

半刻（約一時間）後、珠響が温もりを求めて手を伸ばす。

其処にはもう、男の感触は無かった…。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0248a/>

人斬り獣三郎【闇影を斬る】

2008年11月7日06時34分発行